



双塔

カトリック新潟教会

2015年 5月
No. 324

愛の歌、今日の歌

主任司祭 ラウール・バラデス

数年前に、私は車に乗って移動中にラジオを聞いていました。男性 DJ は電話でリクエストを受け付けていて、その理由などを聞いた後、電話を切る前にいきなり「愛しているよ」と言って会話を終わらせました。気持ち悪いなと思って、私はラジオ局を替えました。メキシコ生まれの私は愛の表現、特にアメリカ人がよく使う「I LOVE YOU」のような言い方はとても苦手だからです。

現代に「愛」という言葉はあまりにも使われ過ぎて、本来の意味を失いつつあるような気がします。宗教の世界も例外ではありません。用語として「愛」を使用し続けてきたキリスト教の中でさえ、その系統がないとは言えないでしょう。本来の意味で「神の愛」、「隣人愛」、「相互愛」などの表現を聖書的に理解し、体験し直す必要があると最近思い始めました。

そのために、旧約の雅歌は一つの手がかりになるだろうと、この間の聖書勉強会で気がつきました。本来、男女の愛を歌ったこの詩集は、聖書として認められた上で私たちに何かを伝えるはずですが、しかし、読み始めたら、全く慣れていない比喩、愛の表現などにぶつかります。まさに、「愛しているよ」と軽く言い続けていたラジオ DJ のことを思い浮かべます。

しかし、それだけで諦めることはできません。探してみたら「永遠の愛の歌」という本に出会いました。タイトルから、作者は「永遠の」と強調して雅歌を別の次元で認識していると分かります。人間同士の愛は永遠に続くのは難しく、かなりモロいと誰もが分かるからです。

「雅歌」が語るそうした愛は、比喩的に「神の想い」を語ることになるのです。イスラエル、教会、わたし一人に対しての愛について語る。この「永遠の」愛に応えるため、目に映らない神の愛に帰するため、隣人を大切にするという他の方法しかないと言ハネの手紙が教えてくれます。そして、この「永遠の」愛に応えるのに、私たちには今しかない。

「たくさんの思い出をありがとう、君の料理は世界一美味しかった、感謝」と、ある夫が、若くして亡くなった妻の墓に書き込ませました。その墓の写真のある女性の方に見せたら、ため息を漏らしながら「それは、墓ではなく生きている間に聞きたいな」と呟きました。そうです、「永遠の」愛は死んでから始まるものではない、今から始まると言えるでしょう。神にたいしても同様です。

あなたは御存知です おゝ 私の神よ！

この世であなたを愛するために

私には今日だけしかないことを！……………

(幼きイエスの聖テレジア 「今日の歌」)

■ 聖香油のミサ ----- 3月31日(火) 10:00 -----

桜の便りが舞い込む3月最終日。聖堂には、新潟教区内で働く26名の司祭が並び、「聖香油のミサ」が行われた。寺尾、花園、新発田教会の方々も来られて50名ほどの参加であった。

菊地司教様が司祭方に初心を改めて確認するよう促されると、司祭方は沈黙のうちに叙階の日の誓いを新たにされた。また、聖体拝領後、秘跡の執行に用いられる「病者の油」、「洗礼志願者の油」を祝別。堅信と叙階の秘跡に用いられる「聖香油」は、司教様がオリーブオイルに香料を混ぜ合わせて息を吹き込み（聖霊の注ぎのシンボリック的動作）、聖別の祈りを唱え、全員の司祭が右手を差しのべて祝別を行った。



■ 復活の聖なる徹夜祭 ----- 4月4日(土) 19:00 -----

真っ暗な聖堂に、ラウル神父様が歌う「キリストの光」に会衆が「神に感謝」と答え、次々とろうソクに“復活の火”が灯された。ナジ神父様が「復活賛歌」を歌われ、「栄光の賛歌」と共に、「主の晩餐の夕べのミサ」以来の鐘が聖堂内に鳴り響いた。

菊地司教様は「私たちは、福音の価値観に対する漠然とした社会の圧力に屈してしまいがちだが、イエス様が『恐れることはない』と身をもって力づけられ、弟子たちが勇気をもって進むことができたことを忘れてはならない」と話され、「恐れている者が、喜びを伝えることはできない。喜びを知っている者こそが、人々に喜びを伝えることができる」と結ばれた。

その後、「入信の秘跡」が執り行われ、諸聖人の連願、水の祝福に続いて3人の洗礼志願者が悪霊の拒否と信仰宣言を行い、洗礼と堅信を授けられた。その後、会衆者が「洗礼の約束の更新」を行った。9時過ぎに聖堂を出ると、雲の間から皆既月食がみえた。

■ 主の復活の主日 ----- 4月5日(日) 9:30 -----

外は雨でも、聖堂内は「ご復活、おめでとうございます」の明るい挨拶が飛び交い、東京や札幌、函館などから来られた方もおられ180名ほどが集まった。

菊地司教様はミサの中で「福音書の中のペトロの姿は恐怖であるが、使徒言行録のペトロは力強い。その理由は、彼が主の復活を体験して180度変わったからで、不安や恐れが喜びと希望に変わったのです」と話され、「私たちはペトロのような体験はできないが、せめて洗礼を受けて喜びに満ちた3人の姿を見て、自分の時のことを思い出し、喜びを人々に伝えましょう。宣教の勇気を祈ります」と結ばれた。



ミサ後は、センター2階で「祝賀会」が行われた。東京から来られたイエスのカリタス修道女会（旧・宮崎カリタス修道女会）のシスター3名が手話を交えて美しいハーモニーを披露、青年や子供たちもギター伴奏で歌い、司教様はピアノの弾き語り「なごり雪」を熱唱され

(楽譜はスマートフォンで!)、なごやかな会であった。そして、手作りのハヤシライスにみんな満足。準備して下さった方々に感謝です!!

